

2003年度秋学期 テクニカルライティング・第7回配布資料(2) (担当・斎藤俊則)

1.トピックセンテンスと展開部

日本は工業化社会から情報化社会に移り変わりつつある。かつて日本製が世界を席巻したカメラやテレビは、韓国・台湾などが主生産国になりつつある。自動車も同じ道をたどりかけている。やがて日本は、製品でなく技術(すなわち情報!)を生みだし、輸出することによって経済力を維持することになるだろう。

2.トピックセンテンスの位置のバリエーション

かつて日本製が世界を席巻したカメラやテレビは、韓国・台湾などが主生産国になりつつある。自動車も同じ道をたどりかけている。やがて日本は、製品でなく技術(すなわち情報!)を生みだし、輸出することによって経済力を維持することになるだろう。日本は工業化社会から情報化社会に移り変わりつつあるのである。

かつて日本製が世界を席巻したカメラやテレビは、韓国・台湾などが主生産国になりつつある。自動車も同じ道をたどりかけている。日本は工業化社会から情報化社会に移り変わりつつあるのだ。やがて日本は、製品でなく技術(すなわち情報!)を生みだし、輸出することによって経済力を維持することになるだろう。

上記の3つの例文は、木下是雄『レポートの組み立て方』181～184頁から抜粋

3.パラグラフの実例

人間の認知過程をとらえる方法として、大きく2つのアプローチがある。一つは情報が人の頭の中をどのように流れていくかという観点から、認知過程の特性や制約を明らかにしようとするアプローチであり、もう一つは認知活動を問題解決としてとらえ、人がどのような問題をどのような方法で解決しているかを記述するアプローチである。前者が、認知過程のアーキテクチャ的側面に注目し、内容から独立した認知過程とその制約条件を描こうとするのに対し、後者は認知過程の内容を対象とし、その意味を全体の中で位置づけていくアプローチである。

海保博之・原田悦子・黒須正明『認知的インターフェース コンピュータとの知的つきあいかた』新曜社、40頁

ピタゴラス(Pythagoras, B.C.572頃～492頃)はイオニアのサモス島に生まれた。初めタレスに学んだが、タレスはピタゴラスが他の青年に比べて非凡なることを知り、自ら彼にエジプト留学をすすめたという。ピタゴラスは師タレスのすすめに従ってエジプトに留学、さらにバビロニアにも留学し、数学・天文学を学んだ。帰国後は故郷のサモス島に学校を開いて弟子の教育に励んだが、故郷に入れられず、政治的圧迫などもあり、逃れてイタリア南部のクロトンに行き学校を開いた。ここでは大いに成功してたくさんの弟子を集めた。これらの弟子がピタゴラス学派を形成していった。

道脇義正『教養 数学入門』東京図書、2頁

哲学が現実から出立するということは、何か現実というものを彼方に置いて、それに就いて研究するというのではない。現実是我々に対してあるというよりも、その中に我々があるのである。我々はそのに生まれ、そこで働き、そこで考え、そこに死ぬる、そこが現実である。我々に対してあるものは哲学の言葉で対象と呼ばれている。現実是对象であるよりもむしろ我々がそこに立っている足場であり、基底である。或いはいつそう正確にいうと、現実が対象としてでなく基底として問題になってくるといのが哲学に固有なことである。科学は現実を対象的に考察する。しかるに現実が足下から揺らぎ出すのを憶えるとき、基底の危機というものから哲学は生まれてくる。哲学は現実就いて考えるのではなく、現実の中から考えるのである。現実是我々がそこにおいてある場所であり、我々自身、現実の中のひとつの現実にほかならぬ。対象として考える場合、現実には哲学の唯一の出発点でありえないにしても、場所として考える場合、現実以外に哲学の出発点はないのである。

三木清『哲学入門』岩波新書、1～2頁